日尾荊山判『七拾六番歌合』翻刻と解題

福田安典・時田紗緒里・都築里花子・堀万佑子・大崎園夏・小澤桃子

［要旨］本稿では、二〇二〇年度大学院のzoom遠隔講義の成果として、日尾荊山判『七十六番歌合』の翻刻と解題を掲載する。

『七十六番歌合』は、日尾荊山（一七八九―一八五九）が指導する江戸武家屋敷で女性の参加も多い歌合であった。

主宰及び判者を務めた日尾荊山は、江戸後期の儒学者・国学者である。寛政元年、武蔵国秩父日尾村（現在の埼玉県小鹿野町日尾）に生まれる。安政六年没、享年七十一。江戸に出た後、亀田鵬斎等の元で学問を究め、私塾「至誠堂」で数々の門人を育成した経歴を持つ。また、漢文訓読「日尾点」を編み出し、代表作『訓点復古』（天保六年刊）を始めとした、日本古典に関する多くの著作を残している。二〇一九年には生誕二三〇年・没後一六〇年を記念し、出生地である小鹿野町において、同じく学者であった妻・邦子や娘・直子らの資料を一堂に公開した特別展が開催された。

今回扱う『七十六番歌合』は、福田安典「日尾荊山判『七十六番歌合』をめぐって」（日本女子大学国語国文学会『国文目白』（54号、２０１５年２月）において既に紹介したが、この論を元にして、男女身分も関係無く参加者それぞれが歌合を通して培った豊富な知識を糧に本格的な歌合が行われたことを新たな見解として導き出した。歌合参加者が、古典和歌から中国故事に至るまで、幅広い知識を活かした和歌作りを荊山によって指導されていたことが窺える。

また、題意に合う歌となる様に判者である荊山が歌を添削したことから、多種多様な和歌に対し、漢学及び和学の観点より判定を行った荊山の、多くの門人を集めた塾経営者としての顔が窺えるのである。

今後この資料が、日尾荊山とその周辺についての研究に活用されることを期待する。

［キーワード］日尾荊山・『七十六番歌合』・江戸後期・国学者

本稿では日尾荊山判『七十六番歌合』の翻刻と解題を掲載する。書誌は後掲。二〇二〇年度の大学院のzoom遠隔講義の成果で、時田（三七・四五・四六・四七・五〇・五七・五八・五九・六〇・七二・追加）、都築（三八・四八・四九・六一・六二）、堀（三九・四〇・五一・五二・六三・六四・六五）、大崎（四一・四二・五三・五四・六六・六七・六八）、小澤（四三・四四・五五・五六・六九・七〇・七一）を担当した。

【凡例】

一、平仮名　現行の字体を用いた。

一、漢字　新字体に改めた。

一、句点・オドリ字　底本を忠実に翻刻することを原則とするため施さなかった。

一、判詞の行移りは原文通りを原則とするが、一部改めた。

一、末尾名寄せは適宜【　】などの処理を施した。

【本文】

三十七番　時々見恋

左　　道成

露ふかきあしたのはらのかきわらひをり〳〵見ては袖ぬらしけり

右　勝　　八百子

よそにのみ月日経にけり飛鳥のしは〳〵めにそ見ゆる物から

左かきわらひ新拾遺知家けふの日はくるゝと

やまのかきわらひ明はまた見むをりすきぬまにと

いへる詞をめつらしう思ひてとり出られた

めれと其詮なし知家のうたは日のくるゝと山に

樞戸とかけさて鑰とかけて明けはつゝけたる也

くるゝ戸は源氏花宴に見えたりさて此哥は初蕨

または下わらひなといひてもありぬへきをや右月日

経にけりは光陰の早くすき行を飛鳥にたとへ

てよしあしに心ひかれて朝夕のめにしたる鳥の

行方しらすもとよめりし古き抄物によりて

さて夫を女によそへたり左申むね有をもて例に

たかひて右を勝とす

三拾八番

左　　道世

あしたにも夕にも見しおもかけはたへすそかよふ夢のうきはし

右　勝　　はつせ

難波かたしほのひるまをよすかにてみるめそあまかいのち成ける

左は巫山の神女か楚襄王の夢に見へてあし

たに雨となり夕には雲と成てまみへ参ら

せむといへりし古事に定家の春夜の夢

のうきはしとたえして峯にわかるゝよこ

雲の空といへるを思ひてかれはとたへして

とよめるをこれはことさらにたえすそかよふ

とよめる歟されと一首のさまは右少しく

まさりぬへし

三拾九番

左　　長たゝ

中々にみてはなみたにくれは鳥あやなくすくす折そおほかる

右　勝　　やすみ

いかにせむ賤かをりたくしは〳〵も見なからあはてもゆる思ひを

左右かたみに申むねなくとゝのひたるか中に右は殊さらなり

四拾番

左　勝　　暉子

あな恋し霞のまよりほの〳〵とをり〳〵みする花のおもかけ

右　　秀なり

みむことはたへまかちなる人をさへおもひわするゝ時の間もなし

左古今なる山さくら霞のまよりほのかにもみて
しきみこそ恋しかりけれといへる心はへを学
ひてつゝけからいとをさなかれとまさしく初学の
人と見ゆれはきこえたりと申へし
右本の句みる事はたへまかちなる人をたにと
あるへしさへはかゝる所にあるへき詞ならす
たにとさへとのけちめはまろかうひまなひの
ためにものし〳〵たにさへと云へるさうしに
さとひことにときなしてくはしくしるしけり
序あらは見るへしさてしはらく左を勝とす

四拾一番
左　勝　　こま子
逢事はかたのゝきゝす恋わひてをりをり〳〵みてはねをのみそなく
右　　成正
うらにすむ蜑ならぬ身も折々のみるめはかりに袖そぬれける
左させる節もなけれとうたからなたらかに
聞ゆ右心詞こまやかなるにゝたれと少しく
いひふりたるにや畢竟左に勝をゆつりぬへし

四拾二番
左　持　　下枝子
たまさかにみれは恋ちや増る覧つねよりいとゝ袖は濡けり
右　　英順
わか恋は雲行みねの月影にしは〳〵みへて心そら也
左腰の句たゝ恋といひてはことたらねは恋ちとは
いひけむさらは用なき事也恋路にはふみわくか
まとふなとよせの詞あるへしあるは泥の事に
よせて深きこひちにおりたつなともよめり
こゝは見るにもまさるおもひ河なとあらは結句
に照映有ぬへしされと是はこゝろみにいふ
まてにてよしとするにはあらす右も初五あた
人はなとゝ置て三の句月影かなとあらては
聞へす所詮持なとにや

四拾三番
左　持　　たゝ香
うら波のよるのみるめも有なからかりにもあはぬ蜑か身そうき
右　　千代瀬
ともすれは泪にぬるゝ袂かなしほのみちひのうらならなくに
左右ともに聞へたれと題意うとけれは判せす

四拾四番
左　持　　待瀬
恋すれは人に心をおきのいしのみえかくれする君そわりなき
右　　ひろし
見し影は有明のつきにあくかれていくよか露に立そほちけむ
左右かたみに初五落着せす左は朝夕に
なとあるへきか右はほのみてしなと引直し
てもなほ題意にうとかるへく覚ゆれはなそ
らへて為持

四拾五番
左　持　　藤尾
こゝろあての雲のはつかにみし月の手にもとまれす物を社思へ

右　　とし

たまさかにみてなくさめとかつらきやよそめにかゝる人の俤

左うたはあしからねとはつかに見しにては

題にかなはす右はよそにのみ見てやゝみなん

かつらきやといへる本哥になつみて詞つゝきたと

〳〵しく勝へきほとにもあらねは為持

四拾六番

左　勝　　松をか

みるたひにこゝろ空なる浮雲のはれぬおもひに袖しほりつゝ

右　　すか

しは〳〵にみても心はうきぬなはふかきみ池に生ふる物ゆゑ

左一わたり聞へたり右ふかきみいけ成心

ならすこひちにとあらはや左勝たり

四拾七番

左　　正よし

見る計心は空にくれ竹や葉わけの月とをりふしのまに

右　勝　　とき

思ひ餘り袖の色にやあらはれんをり〳〵みるをあふになしても

左心得かねたりおそらくは無心所着にちかゝ

らんことを右は下の句伊物の語をとり出ら

れておほけなきやうなれと題意にふさ

はしけれは勝と申す七十拾貳の右の哥も此こと

はを用ひてこゝなるにははるかにまされり

そはそこに判するを見よ

四拾八番

左　持　　たか

あふひてふ名はかけてしも頼まほしをりふしことのみすのまとひは

右　　ちよ

みてしより心はそらにうき雲やたへぬおもひにふる泪かな

左結句何とも心ゆかす右うたの心はあきら

かなれと見そむる恋なとのことく聞ゆるにや

なほ勝とも申かたかるへし

四拾九番

左　　ひろし

へたてゝは音そなかれける山鳥のをろのかゝみの影ならなくに

右　勝　　やすみ

さきの世の契かあさかの沼なれやかつみなからに逢瀬あらぬは

左題意うとしたゝしをろのかゝみの影とい

へるにとき〳〵見るといふこゝろをふくめたり

なといはむかいとおほつかなし右はとゝ

のひて聞ゆ勝たるへし

五拾番

左　　なり之

玉ほこのみちのたよりの小柴かきしは〳〵みれとおとろかさはや

右　勝　　くに

よそにのみ見てやはやまむいく度か袖にしくるゝ峯のうき雲

左二の句道の行てのとあらまほし右は例の

新古今かつらきや高まの山といへるを本哥にして

よみ出られたりと見ゆ勝たるへきなむ

因に云袖にしくるゝみねのうき雲といへるは

新古有家のわれなからおもふかものをとはかりに
袖にしくるゝにはの松風といへるを学はれ
たるなるへし

五拾一番

左　持　　行高

をり〳〵に見ゆるもはかなさや巻のさすかに中は思ひきらなて

右　　ぬひ

中かきの露のたへまのをり〳〵にみてのみしのふ朝顔の花
左はかなさや巻といひよせたるは後撰に貫之
のみちの国へまかりける人に火打をつかはすとて
書付けるといへるうた折々にうちてやきひの煙あらは
こゝろさすかをしのへとそ思ふ為家抄にさすかは
腰刀なり燧をつくると有にもとつきて折々と打
出て火打の火をきるに寄せておもひきらなて
とよめるか火をきると云は嵐嚢鈔に火打と云字は
鑽の字をもちゆ火をきるとよめは心かなひたりと
有ともよく云詞也さやまきの事はこゝに無用と
なれは委しくはいはす右ももの語の風情なと
ほのめかしてあしからす聞ゆれと左の力あるに勝
ほとならねは準へて為持

五拾二番

左　勝　　なか忠

しは舟のしは〳〵君をみなれ棹つひのよるせを待こそいふれ

右　　ふく

わか草の生行末そたのまるゝみるたひことに色しそはれは
左右聞へたり左少しくまされりされと尾句待わたるかなとあるへし

五拾三番

左　勝　　道世

朝夕にみるめかりつゝ伊勢の海のかひもなきさに年をへよとや

右

おもひ餘るをり〳〵ことのかいまみにはしたなきまて袖は濡けり
右は一首伊勢物語はしめの段の詞もてつゝ
り立られたれといふにも聞へす左よくとゝ
のひてきこゆ勝にてこそ

五拾四番

左　勝　　松麿

つれなくも猶をり〳〵はみわの市うるよしなしと思ひすてめや

右　　あや

ありし日のおもかけもまたさらぬまにわりなや人の何とみゆらむ
左三わの市めつらし右おもひ入たる趣なから
末の句いひおほせすまたもや人を見てかわり
なきなとあらはやと思ふはいかに左を勝とす

五拾五番

左　勝　　道成

玉たれのをすのゆらきの折々にみる面影をあくよしもかな

右　　やほ子

わか恋は雲間の月のをり〳〵に見えてそいとゝ袖のぬれける
左平懐なるも右一首おほつかなけなるは下の句
つゝけからよからぬから也見へても袖にかけ
もやとらすなともあらはやさても十分にも

あらす此つかひともに初まなひの人と見ゆ
れは手いたくはろうせすしはらく左を勝とす

五拾六番
左　持　　みちよ
わか恋は春のさくらに秋の月ちたひみれともあく時そなき
右　　はつせ
むら雲にもれ出る月の影ならてみえみ見えすみ物おもへとや
左右題ははるかにことなれど歌からは同しほとのことにや侍らん

五拾七番
左　勝　　なかたゝ
かくとたにおもふ心をゝり〳〵にみきはのあしのほのめかさはや
右　　やすみ
言とはむよしもあらすて見る度にいとゝおもひのますかゝみかな
左初五かくはかりとあらまほし右聞へたれ
と初二いさゝかも縁なくてますかゝみにはかに
とりいてられたるやうなりおもかけなとよせ
ある詞も侍るをやなほ引直して左を勝とす
因に言右は頓阿のうき中はかゝみにうつる
影なれやありとは見れとこともかよはすと
いへるをあしう学はれたるにか是らは格別の
事也

五拾八番
左　勝　　てる子
うしつらしよそにみるまにたまかつらたへすおもひのなとみたるらむ
右　　秀成
わすれぬと思ひおもへは中々にたまさかに見る君そくるしき
右初二いひさまたしかならす左先聞へたりとて勝とす

五拾九番
左　　駒子
わか恋は沖のしらすのさゝれ石しほひしほみち袖そぬれぬる
右　勝　　成正
おもふてふ人をたまさか三ヶ月のつれなきかけをたのみ社すれ
左題意たしかならぬのみならすつゝけからも
よくもきこへす右も初五のてふと言詞こゝに
有つかすおもふそのなとあるへきなり引直し
て暫く勝とす

六拾番
左　勝　　下枝子
おもひねの夢はかりさへうれしきにをり〳〵みゆる人そ恋しき
右　　英順
ゆく舟の沖つなみ間に風早くみえつかくれつこかるへらなり
左さへはたにとあるへき所也右は題意したし
からすしらへもまた十分ならすよりて引
なほして左を勝とす

六拾一番
左　勝　　たゝか
うちたえてみさらましかは中ゝにおもひまきるゝ折もあらまし
右　　千代世
俤のかすみはてたる山のはにをり〳〵みゆる花もうらめし
左語格もすかたもよくとゝのひてきこゆ右ははるかにおとりぬへし

六拾二番

左　持　　待瀬

ひるの間は草にかくるゝ蛍よりみぬよそまさるわかおもひかな

右　　ひろし

みるまゝにとふよしもかな鳥しみのつはさは人にあらぬものから

左題意おほろけにやそのうへ四の句見ぬよそ

といへるその文字にて夜のまさり行はかりをかこ

てるやうに聞ゆるそかし右は問に飛をかねたる

かともきゝなさるれとよく〳〵あちはひみれは

下の句の意つらぬきてもきこえすなすらへて

持なとにこそ

六拾三番

左　持　　藤尾

かぜさわき小簾まき上し朝顔の花みてしより袖そ露けき

右　　とし

みるたひに恋しかりけりなか〳〵にあはぬおもひを何かこつ覧

左野わきの巻の心なとにやされと題意にかなへり

ともおほへす右なか〳〵こゝに有つかすともに

申旨ある持にて侍るへし

六拾四番

左　持　　松岡

なれきてもあまか衣のまとほなる見るめはかりに袖ぬらすかな

右　　すか

けふもまた見てのみ過ぬ花薄ほにいててなひく時も有やと

左右心詞おなしほとの持にて侍るへし

六拾五番

左　　正よし

うき人につらさやますと思ひつゝしは〳〵みてし我そをさなき

右　勝　　とき

はかなしなくるしき恋もをり〳〵にみるを心のなくさみにして

左右口つきいとをさなし左はことのこゝろ

ときこえかたけれは右のかなしいひとりたるを

勝とす

六拾六番

左　持　　たか

いのりてもあふせもしらすきふね川をり〳〵みつるよそめのみにて

右　　ちよ

うき人はすまのうらわのなみ枕より〳〵みてはぬるゝ袖かな

左右きこへたれときふね川すまのうらさ

せるよせもなくとり出られたる詮なさは

おなしほとの事なるへし

六拾七番

左　勝　　ひろし

みるたひにもへ社増れ春の野の草のはつかにおもひ初しか

右　　やすみ

しは〳〵もみるめかる身のいひよらんよすかをなみに袖ぬらし筒

左右ともに聞へたり左少しくまさりぬへし

六拾八番

左　　なか之

をり〳〵にみては心を染川のわたる世をこそしらまほしけれ

右　勝　　くに
あふ事はさもかた糸のより〳〵にみるはなか〳〵くるしかりけり
　このつかひも左右申むねなくと、のひたり
　右のかた口つきすこしくまされるにや
六拾九番
　左　勝　　行高
わか袖になみたの露の玉さかに見ても見まくのほしそわつらふ
　右　　ぬひ
みね高みをられぬのみか白雲のたえますくなき花いかにせん
　右時、の意たしかならす左をかしけにと、のひたり勝にてこそ
七拾番
　左　持　　なかた、
いかにせん猶をり〳〵はみちのくのいはての山のたにのうもれ木
　右　　ふく
沖津ふねなみま〳〵にほの見へてそでのうら浪猶かけよとか
　左一首おほろけなり右はなみま〳〵にての
　うら浪立かさなりたるかいふせけれは勝劣
　をいはす
七拾一番
　左　　みちよ
朝夕にみてもあやなししかすかにへたてし物をおもはましかは
　右　勝　　くに
しら雲のなひくかたこそかたからめよそめ計はとたへすもかな
　左腰の句なか〳〵になとあるへきか右ことなし
　勝にてあるへし

七拾二番
　左　　松まろ
折々にみても霞の間遠にていつたちよらむ花のかけそも
　右　勝　　あや
みるをのみあふになしてもともすれはとたへかちなる中そくるしき
　右見るをのみあふになしてもといへる詞は四十七
　の右に判せしことく勢語のうたの要語なれとかく
　とり入て題意に親しくいひこなしたるか作者の
　手からなり左もあしからねとなほおよひ
　かたかるへし
追加一
　左　勝　　みよ
たちさわくなみたの袖をいかにせんをり〳〵よするみるめはかりに
　右　　竹子
つたかつらたえぬ契とたのむかなよしたまさかのみるめはかりも
　左右は同しみるめはかりには侍れど左は寄も
　有てつ、けからもあしからねはとて勝たり
二
　左　　きみ
かひなしや入ぬる磯の草かくれみるめかるへき折そすくなき
　右　勝　　ふく
をり〳〵にみるめかるともかひなしなはなれこしまの蜑かうき身は
　左初五かく置ては結句みるめはかりはなと
　様にかへるてにをはなくてはと、のほらす右の
　かひなしなはと、のひたるとて勝とす

三

左　持　　みよ

雨はれし雲間の月のをり〳〵にみへかくれする君にも有かな

右　　たけ子

おもひ餘り心も空になよ竹のをりふしことにみゆる物から

左題意たしかなりとも覚す右も一首とゝのひてもきこへす持にて侍るへし

因に左尾句君かわりなさなとあらは可然か

四

左　　きみ

折々にみるめ計の契にてよるへはなみのうきしまか原

右　勝　　ふく

玉たれのたまさかにのみ俤をみてすくしつる恋そはかなき

左うきしまか原うきて聞ゆ右はとゝのひたりとて為勝

下の巻時々見恋のうたより撰いてたるくさ〳〵

いかにせむ賤かをりたくしは〳〵もみなからあはてもゆる思ひを　やすみ

思ひ餘り袖の色にやあらはれんをり〳〵見るをあふになしても　とき

よそにのみ見てやはやまむいく度か袖にしくるゝ峯のうき雲　くに

朝夕にみるめかりつゝいせの海のかひもなきさに年をへよとや　みちよ

つれなくもなほをり〳〵はみわの市うるよしなしとおもひすてめや　松丸

うちたへて見さらましかは中ゝにおもひまきるゝ折もあらまし　たゝか

あふことはさもかた糸のより〳〵にみるはなか〳〵くるしかりけり　くに

見るをのみあふになしてもともすれはとたへかちなる中そくるしき　あや

月雪花は

いかにせむ賤かをりたく　花　やすみ

うち絶てみさらましかは　雪　たゝか

見るをのみあふになしても　月　あや

判者　源直麿

左

道成（縣令勝田次郎属長脇谷甲介）【勝一持二】・みち世（同属　野田東一郎）【持二】・なかたゝ（同属　岡田与八郎）【勝二】・てる子（庄内侯令女）【勝一持二】・こま子（同侯令女）【勝二】・下枝子【勝一持二】・たゝか（朽木）【勝一持二】・まちせ（松山奥女中）【持二】・ふちを（庄内奥老女）【持二】・まつ岡（同奥老女）【勝一持二】・正よし（高崎藩医　田中氏）・たか【持二】・ひろし（高崎藩）【勝二】・なかゆき（勝田次郎属長　岡本弥一郎）・行高（幕府人　中坊陽之助別名）【勝一持二】・なかたゝ【勝一持二】・みちよ【勝二】・松麿（長之別名）【勝二】・みよ（松山奥中臈）【勝一持二】・きみ（松山奥中臈）

右

やほ子（幕府人　岡本縫殿助内室）【勝二】・はつせ（庄内奥老中）【勝一持二】・やすみ（朽木藩）【勝二】・秀成（幕府人中坊陪之助）・成正（高崎藩原栄）【勝二】・英順【持二】・ちよせ（庄内奥老中）【持二】・ひろし【持二】・とし【持二】・すか（朽木藩古川氏母）【持二】・とき【勝二】・ちよ（原栄妻）【持二】・保躬【勝二】・くに（直麿妻）【勝二】・ぬひ（庄内奥）【持二】・ふく【持二】・くに【勝二】・あや（直麿女）【勝二】・竹子【持二】・ふく【勝二】

【解題】

書誌は以下である。底本は福田安典蔵。書型：写本。半紙本一冊。縦二十三・八糎、横十六・一糎。表紙は油引き表紙。下巻のみの端本。書貼原題簽「七拾六番歌合　下」。丁数は本文が四十四丁。「二月廿八日　八拾番歌合下けれ答　呉竹のや」（九丁）と合綴。

『七十六番歌合』は、日尾荊山（一七八九―一八五九）が指導する江戸武家屋敷で女性の参加も多い歌合であった。

主宰及び判者を務めた日尾荊山は、江戸後期の儒学者・国学者である。寛政元年、武蔵国秩父日尾村（現在の埼玉県小鹿野町日尾）に生まれ、安政六年没、享年七十一。江戸に出た後、亀田鵬斎等の元で学問を究め、私塾「至誠堂」で数々の門人を育成した経歴を持つ。また、漢文訓読「日尾点」を編み出し、代表作『訓点復古』（天保六年刊）を始めとして、日本古典に関する多くの著作を残している。二〇一九年には生誕二三〇年・没後一六〇年を記念し、出生地である小鹿野町において荊山に加え、同じく学者であった妻・邦子や娘・直子らの資料を一堂に公開した特別展が開催された。

今回扱う『七十六番歌合』は、福田安典「日尾荊山判『七十六番歌合』をめぐって」（日本女子大学国語国文学会『国文目白』（54号）、2015年2月）において既に紹介したが、改めて要点をまとめる。

一　日尾荊山一門による歌合は一門の稽古の為に一年に十一回十年に及んで催された。

二　妻・邦子は庄内藩の江戸藩邸に勤務していた。

三　庄内侯の令女をはじめとする庄内藩の女性たちが多く参加している。

四　荊山の妻女であるくに（邦子）、あや（綾子、後に直子）が参加している

五　本巻中荊山が撰ぶ秀歌八首では優れた歌人らを抑えて自分の妻と娘を選んでいる。

以上五点を踏まえ、今回大学院の演習では、次の見解を導き出した。まず、男女身分も関係無く参加者それぞれが歌合を通して培った豊富な知識を糧に本格的な歌合が行われたことである。

例えば、三拾八番左歌は、中国故事の「巫山の夢」と、藤原定家も歌を取り合わせたことが荊山の判詞によって示されている。四拾七番右歌は、伊勢物語七五段を典拠とすること、五拾三番左歌も、『伊勢物語』第一段を典拠とすることも荊山の判詞により示されている。参加者は、『新古今集』や『伊勢物語』に見られる様な古典和歌は勿論、中国故事に至るまで、幅広い知識を活かした和歌作りを荊山によって指導されていたことが窺える。

さらに、四拾四番判詞「左右かたみに初五落着せす左は朝夕になとあるへきか右はほのみてしなと引直してもなほ題意にうとかるへく覚ゆれはなそ」、五拾一番判詞「火をきると云は壒嚢鈔に火打と云字は鑽の字

をもちゆ火をきるとよめは心かなひたりと有ともよく云詞也」は、共に、題意「時々見恋」に合う様に添削したり、時には、室町中期の類書『塵嚢鈔』を用いるなど、多種多様な和歌に対して、漢学及び和学の観点より判定を行っている。多くの門人を集めた塾の経営者としての顔が窺えるのである。

今後この資料が、日尾荊山とその周辺についての研究に活用されることを望みたい。

また山本正実氏をはじめ小鹿野町教育委員会社会教育課には特別の便宜を図っていただいた。末尾ながら謝辞申し上げる。

Reprinting and bibliography of Hio Keizan's *Nanajuroku Uta-awase*

FUKUDA Yasunori, TOKITA Saori, TSUZUKI Rikako, HORI Mayuko, OHSAKI Sonoka and OZAWA Momoko

[Abstract] This abstract is contained in the reprinting and bibliography of Hio Keizsan's *Nanajurokuban Uta-awase* ("poetry match of 76 rounds") as one of the fruits of the Graduate School's Zoom online lectures for 2020.

The Nanajurokuban Uta-awase is the record of a poetry match at the Edo samurai residence led by Hio Keizan (1789 – 1859), with the participation of many women.

Hio Keizan, who presided over and judged the poetry match, was a Confucianist and Japanese classical scholar of the late Edo period. He was born in 1789, the first year of the Kansei era (1789-1801), in Chichibu's Hiomura, in Musashi Province (present day Hio, Ogano Machi, Saitama Prefecture) and died in the sixth year of the Ansei era (1854 – 1860) at the age of 71. After arriving in Edo, he honed his learning under the tutelage of Kameda Bosai and others and is known for fostering many pupils at the Shiseido school he opened and privately ran. He devised what was known as the "Hio Ten," his unique method for reading the Chinese classics in the Japanese language, and left a large body of work on classical Japanese literature starting with his most celebrated publication "Kunten Fukko," which was printed in the 6th year of the Tenpo era (1835). In 2019, the year marking the 230th anniversary of his birth and 160th anniversary of his death, a special exhibition was hosted in his birthplace, Ogano Machi, which showcased in one place documents related to not only Keizan himself but also his wife Kuniko and daughter Naoko who were also scholars.

The *Nanajurokuban Uta-awase* dealt with here has already been introduced in the article in Volume 54 of the Kokubun Mejiro journal (published in February 2015 by the Japan Women's University Association for the Study of Japanese Language and Literature which was authored by Yasunori Fukuda and entitled "Regarding Hio Keizan's Poetry Match of 76 Rounds." Recent seminars at the graduate school based on Fukuda's arguments led to the fresh opinion that the *Nanajurokuban Uta-awase* was a serious poetry match

fueled by the rich knowledge cultivated through poetry matches indulged in by each of the participants regardless of their gender or social standing. It is suggested that the way the participants in the poetry match composed waka (sometimes known as "tanka" verse) maximizing a wide range of knowledge stretching from classic waka to allusions to Chinese history was due to the instruction they received from Keizan.

Moreover, since Keizan, who himself was the judge of the match corrected the verses in order to match them with the given themes, one becomes able to see the face as a school operator who brought together numerous pupils of Keizan, who made his judgement of the poems from the twin perspective of both Chinese and Japanese classical literature.

It is our hope that these documents will be of use in future research into Hio Keizan and his circle.

[Key Words] Hio Keizan, *Nanajurokuban Uta-awase*, late Edo period, Japanese classical scholar